



■ 結成 10 周年に寄せて 生態系を素材とする生態学のすすめ

生態系工学研究会会長 辻田 時美

現在では広く知られるようになった生態学の歴史と今後の展開について略記する。

まず、生態学の源流を探ってみると、ゲーテの自然観に遡ることができる。ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749 ~ 1832) の自然探求における哲学のなかには常に全体と部分の統一、総合すなわち有機的統一の思想が一貫していた。例えば彼の新生説に見られるように、“生物体のすべての器官はその外部環境の影響のもとに自らの形態や機能を変化させる”と信じて環境と生物の相互関係に対する見識を持って環境について思考し (ゲーテ全集、第 26 巻、1935 年 12 月、改造社)、さらに極端には“動物は環境によって、そして環境に対して形成される”(上記全集、p.344)とまで踏み込んだ大胆な論を展開して、動物の内的完全性と外部に対しての合目的性を論じている。これは、当時すでに環境の生物に対する働きという認識が生物研究における大きな関心事になっていて、環境が概念的に生物の生命活動に不可分の関係にあることが、学問として当時すでに認識されつつあったことを物語るものである。そして、このゲーテに思想的に私淑し、またダーウィニズムの信奉者でもあったドイツの生物学者 E.H.ヘッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834 ~ 1919) は、生物と環境を不離一体の存在として生物学における環境研究の意識とその必要性を説いたが、また同時に生態学 Ecology なる用語を作り出した人として著名な海洋生物学者である。

強烈なゲーテの思想を受け継いだヘッケルは生物の内部形成衝動 innere Bildungstrieb (遺伝など) に対して外部形成衝動 (äußere Bildungstrieb) 即ち環境の影響が加わり、両者の共同作用によって生物の進化が起こると考えたのであるが、このように生物と物理環境を統一的に捉えようとする思想は、気象、気候、地磁気などの研究でも高名なフンボルト (Alexander von Humboldt, 1769 ~ 1859) の哲学に由来すると言っても過言ではない。

フンボルトはその著作 Plant Geography (1807) のなかで、“自然界の原因と結果が結びついている大きな連鎖 (great chain において、どんな事象でも個々独立には在り

得ない”と述べて、植物の生活と環境を関連づけて分布を論じた。また、海洋においては、リービッヒ (J.Liebig; 1840) が植物栄養生態学の観点から、植物の生産量 (収量) は少量に存在する無機成分によって支配されるとする最少律 Law of minimum (あるいは Minimum Law) を提唱して海洋における物質循環説の先駆をなし、環境とは何であるかという生物学における課題をさらに深く具体的に究明する気運を高めた。

当時、自然哲学に支えられてきた自然科学のなかでこれらの歴史的研究が重きをなして、ヘッケルが構成した自然観では生物活動とそれに必要な環境との統一的有機体とその機能が考えられている。さらにこれを具体的に見れば、生物と環境の間の有機的関係を物質の移動即ち物質収支に観点をおいて生物活動の過程を認識し、それはあたかも家の構成と機能になぞらえることができる判断した。このように彼が意図した生態と環境の統一的構造と機能の研究については、1866 年に著した論文がある。

このように、ヘッケルはフンボルトと同じ思考のもとに、自然の複雑な現象はどれひとつ取り上げてみても独立した現象はなくて何らかの原因、結果が繋がっていると、システムの自然観を確立する傾向をみせた。即ち、彼の“nature's household”なる表現にはよくこのへんの思想が折り込まれている。

彼が期待した生物と環境の統一的構造と機能 (具体的には生体と無機環境との間の物質の動きなど) の研究はあたかも家の研究 (The Study of the House) と同じようなものであるとの考えから、ギリシャ語の家 Oikos (英語の house) を引用して、前記の家の研究と呼ぶことのできる生物と環境の相互作用の研究を Ecology と称するようになった。

カッシング (Cushing, D.H.; 1976) によれば、Henry Thoreau は彼が 1858 年に発表した論文の中に Ecology という言葉を学術用語として使用したが、この時の Ecology なる用語が意味する内容に関しては定義は述べなかった。その後 E.ヘッケルは 1869 年に Ecology を動物とその有機

ロゴマークについて

宇宙から見れば、地球は驚くほど美しく、神秘的に青く輝いて見えるという。まるで、それ自体が一つの生命のように。まさにそのように、かつて地球の表面は清澄な大気と水で覆われ、豊かな種類の生命 (生物) で満ち溢れていた。いま地球はその生命が危ぶまれるほど全身創傷の状態深く病んでいる。本「生態系工学研究会」は、その一部分である河口・沿岸域生態系の持つ環境機能を本来のものに復元し、また新たに創出する工学的手法を見出すことを目的として結成された。このロゴマークは、円い地球上に豊かで静澄な大気 (水色) と水 (青) が存在し、波浪で代表される沿岸の物理環境下に多様な生物 (緑) が生息している状態を表しており、本研究会の趣旨を具現している。「RACES」は言うまでもなく本研究会の英語表現での頭文字を採った造語であるが、「種類」の複数形を表し、「種の多様性」を暗示している。ただし、「RACE」はもっぱら動物学の分野で使われ、生物学全般では「SPECIES」が使われるのが普通である。

的、無機的環境に対するするすべての関係total relationであると定義した。

この極めて広範な内容の定義は幾人かの学者を刺激して、これらの学者は次のようなことを指摘した。

即ち、“もしこれがEcologyであるならば、Ecologyで無い学問の分野は極めて僅かになってしまう”とまで言わしめた。しかし、またgenetics (遺伝)、 evolution (進化)、 physiology (生理)、及びbehavior (行動)の4の生物学的分野 biological disciplineは、Ecology と密接に関連している。

カッシングによれば、このようなEcologyの概念ではhome (行動圏)、 niche (生態的地位)、 territory (なわばり)などの意味も含まれており、更に housekeeping (間借り生活)のような内容も折り込まれている。

このような生態学が芽生え、進歩するにつれてその研究の方法としては、ある大きさの時間、空間を単位として生物と環境の間の統一的作用(特に物質の授受)を究明する方向、即ちダイナミックな取組み方が勃興し、生態学的基本単位としての自然の構造と機能をもったシステムの構想が浮かび上がってきた。

オダム (Eugene Odum; 1963) はEcologyという用語に対して“Study of the Structure and Function of Nature”と定義した。このオダムの主張は、生態学に深く浸み透っている生物の形態と機能という識別の発想(形態-機能説) form - and - function ideaを強調する効果をもったが、それでもなお完全に明確に定義づけることには至っていない。

水域に関してはリンデマン (Lindeman; 1942) 型のecosystemsは有名である。われわれは水域について、リンデマンに始まりオダム によって展開され、現代アメリカの生態学の主流となっているこの生態系を構成する栄養段階のエネルギーの流れや物質の循環を量的に分析し、系の維持機構やその遷移の方向を研究する方法を使用している。

生物群集が生存するためには、生存している環境(非生産=物理的)から物質(食物)を取り込まねばならない。また、生物体に不要なあるいは排他的一部の物質は環境の中に放出せねばならない、即ち生物と

外界との間には物質循環が行われている。ひとつの物質の交換のもたらすような機能的なまとまり、即ちこの生物は生態系の中に組み込まれているのである。このような生態系の特徴を機能の面から見ると、1) energyの回路、2) 食物連鎖、3) 時間-空間的多様性のパターン、4) 物質循環(栄養塩食物連鎖循環)=生物地球化学循環、5) 遷移、6) 系内の制御で現すことが出来る。

また生態系は生物が生命を維持するための基本的な機能単位と見なすことができる、即ち生態系は生物(生物群集)と非生物的環境から成り立っている energy mental systemである。これらが相互に他の属性に影響しあって地球上の生命を維持している。したがって、生態系の役割は機能的統一を形成するために地球における構成要素を結びつけることにある。この故に構成要素は相互に何らかの関係をもっている。

われわれが研究対象としている水圏の生態系には色々な大きさ(空間の広がり)が考えられる。一般には、水圏の生態系は流動的な系であるために、研究対象として系の大きさを特定し難いが、それを補うために実験的な研究手法が取られてきている。

メソコスム(mesocosm)実験はそのひとつである。例えば10m³より大きな海洋空間をencloseしてその中の各種測定実験を行うものである。即ちこのような実験生態系の研究があるcontrolled ecosystem力を実施すれば、実験的な生態系の研究ができる。そしてその結果、生態系の諸要素の特性、結び付きなどが、次第に明らかになってくると思われる。

このような実験を准進し、実験生態系的な手法を駆使して生態系のメカニズムを解明しようとする場合も、明かにしようとする現象を明確にしておくことや、対象とする生物種の知見を多く集め、その生態学的な役割を解析し、予測しておくことが重要なことである。さらに、それと共に、数値モデル実験による方法などを利用して、対象とする水圏の時間、空間の生態系メカニズムや生物種の行動や役割をあらかじめ推定しておくなどの準備が必要となる。

発刊会誌

生態系工学研究会シンポジウム講演要旨集

- 「ECOSYSTEM ENGINEERING 創刊号」1991年1月 発刊
生態系工学研究会シンポジウム講演要旨 第1回～第6回を収録
- 「ECOSYSTEM ENGINEERING 第2号」1994年9月 発刊
生態系工学研究会シンポジウム講演要旨 第7回～第12回を収録
- 「ECOSYSTEM ENGINEERING 第3号」1996年9月 発刊
生態系工学研究会シンポジウム講演要旨 第13回～第15回を収録

販売価格 各¥3,000(税込み・送料は購入者負担)

申込方法 購入希望冊子名と部数を1ページ目の下欄の生態系工学研究会事務局までお申し込み下さい。

生態系工学研究会事務局：〒540-0019 大阪市中央区和泉町1-1-14

Tel. 06-6945-6331, Fax. 06-6945-9655, E-mail: races@sogokagaku.co.jp

お支払い 銀行振込にて(手数料はご負担下さい)お振り込みください。

銀行振込：三和銀行谷町支店(普通貯金No.3807661)生態系工学研究会まで

生態系工学研究会シンポジウムの開催経緯

注) 講演者の所属は開催当時のものです。

【第1回シンポジウム】

開催日：1987年10月20日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：生態系工学とは
 講演： 小川原湖開発に伴う重要魚種対策
 遊佐多津雄（(有)環境技術研究所）
 人工礁設置計画の考え方について
 - 付八丈島のトコブシ礁の事例 -
 加藤重一（長崎大学工学部）
 底質改善技術の考え方について
 - 富栄養化防止対策との関連で -
 畑 幸彦（高知大学農学部）

海洋の生物活動と二酸化炭素の収支
 半田暢彦（名古屋大学水圏科学研究所）
 人間の生活に関する海洋環境の多元性
 辻田時美（北海道大学名誉教授）

【第2回シンポジウム】

開催日：1988年5月27日
 場所：全共連ビル（東京）
 テーマ：砂泥域の生態系工学
 講演： 海岸域の水力学的条件と砂泥域の変動性
 及び制御技術
 - 砂浜域の変動性と砕波帯内の物理環境 -
 加藤一正（運輸省港湾技術研究所）
 砂泥域の変動性と有用貝類の幼生集積お
 よび漁場形成
 - ウバガイ漁場形成に係わる予備的検
 討 -
 中村義治（福島県水産試験場）
 秋元義正（福島県水産試験場）
 砂泥域の環境と動物群集
 - 異体類の生産と関連して -
 菊池泰二（九州大学理学部）
 砂泥域の環境
 清水 誠（東京大学農学部）

【第3回シンポジウム】

開催日：1988年10月20日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：藻場の生態系工学
 講演： 人工藻場造成
 山内幸児（兵庫県水産試験場）
 藻場の物質循環
 服部明彦（神奈川大学知識情報研究所）
 藻場造成と環境について
 菊池泰二（九州大学理学部）

【第4回シンポジウム】

開催日：1989年5月2日
 場所：全共連ビル（東京）
 テーマ：にごりについて（第1回）
 講演： 海の生態系における有機懸濁物
 辻田時美（北海道大学名誉教授）
 沿岸海水浄化への生物膜法の応用
 - 数値シミュレーションによる浄化効果の
 検討 -
 小田一紀（大阪市立大学工学部）
 付着生物利用による水質浄化について
 金子文夫（大成建設(株)生物学研究所）

【第5回シンポジウム】

開催日：1990年1月16日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：にごりについて（第2回）
 講演： 魚礁と生物
 小川良徳（(財)マリノフォーラム21）

【第6回シンポジウム】

開催日：1990年6月25日
 場所：麹町会館（東京）
 テーマ：にごりについて（第3回）
 講演： にごりの原因物質の特性認識と生態系工学
 辻田時美（北海道大学名誉教授）
 水生生物の生存上からみたにごり
 廣崎芳次（野生水族繁殖センター）
 海の濁りと魚類・藻類への影響
 松生 治（東京水産大学）
 有機懸濁物質の沈降
 堀江 毅（運輸省港湾技術研究所）

【第7回シンポジウム】

開催日：1991年1月24日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：外海性砂浜域の有効利用（第1回）
 講演： 外海性砂浜水域の水産開発の思考
 辻田時美（北海道大学名誉教授）
 外海性砂浜水域の漂砂底質特性
 - 底質粒度組成の決定機構 -
 田中 仁（東北大学工学部）
 沿岸域の生態系を把握のための環境調査・
 予測手法 - 追波港を例として -
 石川公敏（工業技術院公害資源研究所）

【第8回シンポジウム】

開催日：1991年6月3日
 場所：麹町会館（東京）
 テーマ：外海性砂浜域の有効利用（第2回）
 講演： 漂砂・波浪制御工法と沖合への展開
 河田恵昭（京都大学防災研究所）
 物理環境制御による生態系への影響
 高木儀昌（水産工学研究所水産土木工学
 部）
 日向野純也（同上）

【第9回シンポジウム】

開催日：1991年11月28日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：外海性砂浜域の有効利用（第3回）
 講演： 砂浜の微生物による水質浄化
 細井由彦（鳥取大学工学部）
 村上仁士（徳島大学工業短期大学部）
 砂浜の物質循環に関する動物の機能
 菊池泰二（九州大学理学部）

【第10回シンポジウム】

開催日：1992年7月1日
 場所：はあといん乃木坂（東京）
 テーマ：外海性砂浜域の有効利用（第4回）
 講演： ベンシックエコシステムについて
 中田喜三郎（工業技術院資源環境技術総
 合研究所）
 ウバガイ漁場形成についての数値モデル
 中村義治（水産庁北海道区水産研究所）

注) 講演者の所属は開催当時のものです。

【第11回シンポジウム】

開催日：1993年1月29日
 場所：新大阪シティプラザ（大阪）
 テーマ：生態系研究における計測技術の役割
 講演： 海岸・湖泥の生態系研究と計測技術
 - その現状と課題 -
 津田良平（近畿大学農学部）
 水中顕微鏡と微生物の画像解析
 熊谷道夫（滋賀県琵琶湖研究所）
 水環境における光計測技術の応用
 角井嘉美（電子技術総合研究所
 大阪ライフエレクトロニクス
 研究センター）

【第12回シンポジウム】

開催日：1993年7月6日
 場所：農林年金会館 虎ノ門パストラル(東京)
 テーマ：海底の環境変化と改良技術
 講演： 海底改良技術と生態系の関わり
 中村 充(福井県立大学生物資源学部)
 瀬戸内海の流動・底質環境の現状と改善
 対策
 1) 瀬戸内海の堆積環境について
 星加 章(工業技術院中国工業技術
 研究所)
 2) 閉鎖性海域の環境制御と管理
 上嶋英機(工業技術院中国工業技術
 研究所)
 海底改良技術の具体例
 細川恭史(運輸省港湾技術研究所)

【第13回シンポジウム】

開催日：1994年1月28日
 場所：新大阪シティプラザ(大阪)
 テーマ：海岸構造物による生物への影響
 講演： 生態系と海岸構造物
 - 漂砂移動とチョウセンハマグリの生息域
 の関係を例として -
 宇多高明(建設省土木研究所河川
 研究室)
 関西国際空港の護岸周辺海域の生物につ
 いて
 神田勝己(関西国際空港株式会社)
 護岸構造物の優占生物が内湾の富栄養化に
 及ぼす影響
 - 物質循環における垂直護岸の問題点・大
 阪湾を例にして -
 矢持 進(大阪府立水産試験場)

【第14回シンポジウム】

開催日：1994年7月1日
 場所：砂防会館[別館・シエソパツル・ホ-] (東京)
 テーマ：干潟造成と生態系
 講演： ミティゲーションと技術としての人工干潟
 造成
 - 生態系と生息環境の追跡調査 -
 今村 均(五洋建設株式会社)
 人工干潟の室内実験
 小笠博昭(運輸省港湾技術研究所)
 沿岸水域における浅海域生態系の重要性
 大方昭弘(東北大学農学部)
 自然干潟と生態系
 栗原 康(東北大学名誉教授)

【第15回シンポジウム】

開催日：1995年4月25日
 場所：新大阪シティプラザ(大阪)
 テーマ：生態系機能利用による環境修復技術
 講演： ミティゲーションの中で期待される生態系
 修復技術の評価
 Choule J. Soun(Tekmarine, Inc.)
 エコトーンと生態系修復技術の可能性
 岡田光正(広島大学工学部)
 パネリストからの研究紹介
 環境修復のためのバイオレメディエーシ
 ョン技術
 漆川芳國(工業技術院資源環境技術総合
 研究所)
 江戸川放水路における干潟環境と生態系
 修復
 柵瀬信夫(鹿島建設株式会社技術研究所)
 東京湾における生態系修復事業の効果
 木村賢史(東京都環境保全局東京都環境
 科学研究所応用研究部)

【第16回シンポジウム】

開催日：1996年1月26日
 場所：新大阪シティプラザ(大阪)
 テーマ：海域における構造物と生態系メカニズム
 - 構造物周辺域における生物モニタリングの
 現状 -
 講演： 生態系工学研究会の理念
 小田一紀(大阪市立大学工学部)
 港湾構造物における生態調査と評価
 中瀬浩太(五洋建設株式会社第一技術部)
 人工磯における生物調査と評価
 井上雅夫(関西大学工学部)
 関西国際空港護岸周辺域における生物過程の
 解析
 石川公敏(工業技術院資源環境技術総合
 研究所)

生態系工学研究会事務局

本 部：〒540-0019 大阪市中央区和泉町1-1-14

Tel. 06-6945-6331, Fax. 06-6945-9655, E-mail: races@sogokagaku.co.jp

東京連絡所：〒170 東京都豊島区東池袋2-23-2 東池袋Qビル“F 総合科学(株)内

Tel. 03-5396-1381, Fax. 03-5396-1382

■ 結成趣意書

近年、海洋開発に伴う多種多様の事業が活発になるにつれて、環境影響評価の必要性が高まっていることは周知のとおりです。

この環境影響評価に関する理論・方法の研究や実務等が盛んに行われていますが、その内容は必ずしも十分とはいえない場合が多く、且つ、開発後の経年的追跡調査と環境評価の検証は殆ど行われていません。

いうまでもなく、生態系は生物的・非生物的要素の相互作用で、時間的に変動しつつある実体であり、多彩な生物活動が複雑に絡み合いつつ、多様な環境機能（即ち環境浄化・生物生産・景観・アメニティ・防災・自然保護等に関連する諸種の機能）を有するものであります。しかし、現在行われている開発行為は多くの場合単目的であるため、本来生態系のもつ多様な環境機能が十分発揮されないか、または消滅することも稀ではありません。

私たちは、このような現状認識に基づいて、海洋・沿岸・河口域生態系の持つ望ましい多様な機能をできる限り併存・強化されるべき手法の開発を目指して、

劣化した生態系の改善と修復、望ましい生態系の積極的な創出を図るべく、生物学・生態学・化学・物理学を取り込み、有機的に総合した新しい工学、即ち「生態系工学」と称することのできる技術とその応用の必要性を痛感します。

ここに、種々の分野の研究者の理解を得て研究推進を図るため、「生態系工学研究会」の結成を呼びかける次第であります。

昭和62年（1987年）5月30日
生態系工学研究会 発起人代表
辻田 時美

■ 会 則

(名称)

第1条 本会は、生態系工学研究会（Research Association of Coastal Ecosystem Engineering）と称する。

- (1) 調査・研究部会
- (2) 企画・教育部会
- (3) 出版・広報部会
- (4) 財務・管理部会

(目的)

第2条 本会は沿岸・河口域生態系が有する環境機能の復元と創出を図るための「生態系工学」の進展に寄与し、その研究成果を社会に還元する。

(運営)

第6条 理事会は、会長が議長となり以下の事項を審議する。

(事業)

- 第3条 本会は、第2条の目的を遂行するために以下の事業を行う。
- (1) 自主研究・受託研究（技術開発、環境影響評価手法の開発等）の遂行
 - (2) 若手研究者の育成、共同研究支援、シンポジウム・セミナー・一般講演会の開催
 - (3) 講演論文集（Ecosystem Engineering）の刊行、会報・Newsletter等の発行

- (1) 役員の任免
 - (2) 会則の改廃
 - (3) その他、会の運営上の基本的重要事項
- 2 幹事会は、幹事長が議長となり、事業の推進など本会の運営に関する事項を審議するとともに運営上の実務を処理する。
- 3 会計監事は、会の会計を監査し、理事会に報告する。

(役員)

- 第4条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 幹事長 1名
 - (3) 理事 若干名
 - (4) 幹事 若干名
 - (5) 会計監事 2名

(事務局)

第7条 本会の事務局は以下の所に置く。
〒540 大阪市中央区和泉町1丁目1番14号
米澤ビル和泉町N館4階
生態系工学研究会事務局
Tel . 06-6945-6331
Fax . 06-6945-9655

(組織)

第5条 会長の下に、理事会を置き、理事会の下に幹事会を置く。幹事会任務を遂行するために次の部会を設ける。

(事業年度)

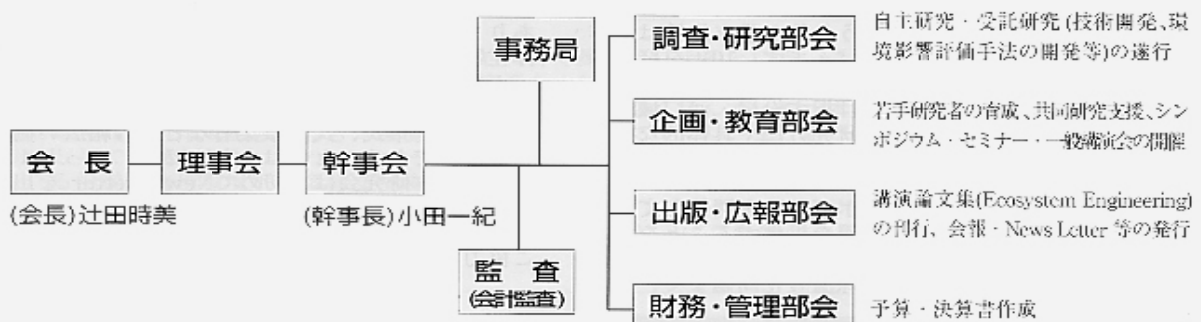
第8条 本会の事業年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

(付則)

第9条 その他必要な事項は、別途審議により定める。
第10条 本会則は1994年7月2日より改正・施行する。

■ 組織図

■ 組織図



理事・幹事名簿

1997年1月31日現在五十音順

役員	氏名	現在役職	専門分野
	秋元 義正	元福島県水産試験場長 技術士	水産水族生態学
	石川 公敏	通産省工業技術院資源環境技術総合研究所 環境影響予測部 主任研究官	海洋生態学
	伊藤 禎彦	京都大学大学院工学研究科助教授 工学博士	環境衛生工学
	岩崎 秀雄	三重大学名誉教授 農学博士	海洋生物学(プランクトン)
	上嶋 英機	通産省工業技術院中国工業技術研究所 海洋環境制御部長 工学博士	海洋環境工学
幹事長	小田 一紀	大阪市立大学工学部教授 工学博士	海岸工学
	加藤 重一	元東京水産大学教授 農学博士	水産土木・海洋工学
	金山 勉	総合科学株式会社 水産学博士	魚類学
	菊池 泰二	九州大学理学部教授 理学博士	海洋生態学(ベントス)
	城戸 勝利	(財)海洋生物環境研究所実証試験場 場長 水産学博士	海洋科学
	栗原 康	東北大学名誉教授(現奥羽大学教授) 理学博士	河口、沿岸域の生態学
	首藤 伸夫	東北大学工学部付属災害制御研究センター 津波工学研究室 教授 工学博士	津波防災、河口部の水理
会長	辻田 時美	北海道大学名誉教授 理学博士	海洋生態学
	津田 良平	近畿大学農学部教授 水産学博士	海洋環境学
	中村 義治	水産庁中央水産研究所 資源増殖研究官 水産学博士	沿岸環境生態学・数理資源学
	蓮沼 啓一	(株)建設・環境研究所 常務取締役 理学博士・技術士	海洋物理
	畑 幸彦	福井県立大学生物資源学部長 高知大学名誉教授 農学博士	海洋微生物学
	廣崎 芳次	野生水族繁殖センター 代表 (前江の島水族館長) 理学博士	水生生物環境学
	細見 正明	東京農工大学工学部助教授 工学博士	環境生態工学
	堀江 毅	神戸大学工学部建設学科教授 工学博士	海岸工学・水環境
	真鍋 武彦	兵庫県但馬水産事務所 室長 農学博士	海洋化学
	村上 仁士	徳島大学工学部建設工学科 教授 工学博士	海岸工学
	森田 良美	東京水産大学名誉教授 理学博士	地球化学・海洋化学
	矢持 進	大阪府水産試験場 主任研究員 農学博士	環境生物学
	遊佐多津夫	(元(有)環境技術研究所 代表取締役) 理学博士・技術士	水産生物生態学
	渡辺 競	東北緑化環境保全株式会社 顧問 (元宮城県水産試験場長) 農学博士	水産環境学

(注) : 理事、 : 幹事、 : 会計幹事の意

編集後記

「生態系工学研究会」は創立から今年で10年を迎えました。今日では、沿岸域の開発行為に伴う環境への影響をなるべく少なくするため、工法、材料、設計手法などの多岐にわたる研究開発が行われるようになっており、その用語として、ECOLOGYなどの「エコ」をとった「エコ……」といった言葉が行政や業界で多く使われ始めています。このことから考えますと、本研究会の「生態系工学」という名稀や設立趣旨は、非常に先見的なものであったと言えます。10年を経た今日、「生態系工学」という分野の重要性はさらに増してきていますが、本研究会が目指す沿岸・河口域生態系の復元と創出を図るための研究方法や具体的な技術手法についてはいまだ試行錯誤の段階にあると言えます。

本研究会は、これまでシンポジウムを開催して、沿岸生態系に関わる国内外の情報を提供することを主な活動としてきました。しかし、今や我々は足もとの沿岸環境問題から全世界的な地球温暖化問題まで、まさに人類の

存亡に関わる多くの環境問題を抱えるに至り、すべて生きとし生ける物との共存を無視しては持続的な発展はできない段階にきています。

本研究会としても「持続可能な発展」を少しでも可能ならしめるため、また傷んだ生態系をできる限り修復するために積極的に社会に寄与しなければならない時期にきていていると考えています。このため、微力ではありますが、昨年から研究会内部に沿岸開発による海洋生物への影響を予測する手法を開発する自主研究チームを発足させました。しかしながら、環境問題は大学人や研究者だけで解決できることはほんの一部であり、行政、市民、民間事業者などとの幅広い協力なくして解決できることではありません。やっと10年目を迎えた本研究会は、初めてNews Letterを出すことになり、新たな気持ちで生態系工学の確立を目指していきたいと考えているところです。今後ともご支援とご協力をお願いします。

(出版・広報部会長, K. . .)